

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 18 日現在

機関番号：13902

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770131

研究課題名(和文) 古代中国文献に関する表現形式に基づく評価基準の構築

研究課題名(英文) Constructing a Method of Evaluation Based on Forms of Expression in Ancient Chinese Texts

研究代表者

鈴木 達明 (SUZUKI, Tatsuaki)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90456814

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中国古代のテキストに見える特徴的な表現形式に注目し、それに基づいてテキストの成立事情・性質を判断する方法を構築することを目指した。具体的には、対話型寓話における演出的な叙述について、『莊子』における使用法の特異性とその思想的背景を明らかにし、それが成立事情の考察に適用できることを示した。また『淮南子』を黄老との関係から思想史的に位置づけることにより、押韻句の出現状況に基づく道家文献のテキスト評価の前提となる知見を得た。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to clarify the philosophical background and rhetorical functions of some characteristic forms of expression in ancient Chinese texts in order to construct a new method of analyzing and evaluating such texts. First, we compared the Zhuang-zi with other pre-Qin texts based on their use of "dramatic narrative." Accordingly, we identified distinctive features of the expression in Zhuang-zi, and explained their philosophical background. As a result, we gained new insights regarding the differences in composition of individual parts of Zhuang-zi. Secondly, we examined the relationship between Huai-nan-zi and Huang-lao texts. Both contain a number of characteristic rhyming passages through which we can explore the relationship of the ancient Taoist texts by comparing their usage.

研究分野：中国文学・中国哲学

キーワード：莊子 諸子百家 表現形式 レトリック 淮南子 道家思想 押韻句

1. 研究開始当初の背景

(1)近年、戦国時代から前漢時代の中国研究は、大きな転機を迎えている。もともとこの時代は、前漢末の劉向・劉歆による大編纂事業以前のテキストを扱うため、文献学的な研究には限界があった。ところが、20世紀後半からの出土資料の相次ぐ発見によって、同時代資料に基づく研究が可能となり、その結果、従来の学術モデルが、実際には古代中国の状況と齟齬する部分の多いものであったことが明らかになってきた。

現在、出土資料を踏まえて、伝世文献の成立時期や諸子百家の各学説・師承関係について通説の書き換えが進められている。これは、今後の議論の基礎となる古代中国の学術モデルを構築し直すことに結びつくものであり、多角的なアプローチが必要とされる課題である。ただ現状では思想内容に注目したものが主流を占めており、文体や修辞といった表現形式に注目するものはごく限られた範囲にとどまっている。

(2)これまで研究代表者は、道家を中心とする先秦諸子について、そこで用いられる様々な表現形式が、思想内容や学派性と関連して、意識的に選び取られたものであったことを検証してきた。その過程で、一つの文献の枠を越えて特定の思想的傾向と表現形式が結びつく例や、逆に表現形式の区別をヒントとして、一書や一篇の中に複数の思想的区分が認められる例を発見している。このことから、表現形式には、テキストの様々な性質(成立時期・地域・学派性など)を判定する重要な基準となりうる可能性が存在し、それを明確化することで、上記のような古代中国の学術モデルの再構築に寄与できると考えた。

2. 研究の目的

古代中国の文献には、押韻句・会話中の反応表現・定型的言い回しなど、様々な修辞が用いられている。本研究は、いくつかの表現形式について、伝世文献・出土文献における出現状況を広く調査し、その思想的役割とそれが果たす役割を明らかにすることで、表現形式に基づき、テキストの成立事情や学派性を判断する評価方法を構築することを目的とする。上記のように、巨視的には古代中国に関する従来の学術モデルの見直しという課題の解決を目指すものと位置づけられる。

3. 研究の方法

本研究では、いくつかの表現形式をとりあげ、まずは使用状況や歴史的な変化の過程を調査し、出現するテキスト相互の関係や思想的要素との関連性を考察することで、その表現形式が持つ文学的機能や思想的背景を明らかにした。次にその結果を踏まえ、当該の表現形式が見られるテキストの成立事情や性質を考察することで、表現形式をテキスト評価の一つの基準とする方法の構築を目指

した。手法的モデルとして参照したのは、Bernhard Karlgren(ベルンハルド・カールグレン)を嚆矢とする、古代中国文献に対する歴史言語学に基づくテキスト分析である。主な調査対象としたのは、以下の表現形式である。

(1)対話型の説話における演出的な叙述

対話を中心とする寓話の地の文において、人物の感情・動作・様態について、踏み込んだ装飾的な描写を行う表現を「演出的な叙述」と呼称する。具体的には、「然・焉・若・如・爾・乎」などの接尾辞を伴った形容詞・副詞やオノマトペを、主に連用修飾語として用いて人物の感情・動作・様態を描写する表現に注目し、対話型説話の地の文におけるその使用状況について、『莊子』を中心として『今文尚書』、『春秋左氏伝』、『論語』、『孟子』、『荀子』、『韓非子』、『戦国策』、『晏子春秋』、『史記』など、先秦から前漢初期までに成立した文献との比較を行った。

(2)押韻句

詩や賦でない散文のテキストにおいて、押韻句を意識的に用いているものを取りあげた。研究代表者は、これまで主に先秦の資料について、そのような押韻句が、特に道家の一派である「黄老」に関係する文献に頻出することを指摘してきたが、本研究では調査範囲を秦漢交代期から前漢初期の文献に広げ、『淮南子』を中心として分析を進めた。それによって得られた結果を先秦文献での調査結果と結合することで、テキストの性質を示す評価基準として使用できることを目指した。

4. 研究成果

(1)演出的な叙述の使用に関する『莊子』の特異性

上記「研究の方法」(1)の表現形式について、比較の結果、『莊子』には、以下の点において顕著な特異性が見られた。

他の文献では、これらの状態形容詞の使用量が多いものでも、種類はそれほど多くなく、むしろステレオタイプ化が進むのに対し、『莊子』は種別の多さにおいて突出していることがわかった。これは、状態形容詞の語彙量の違いよりも使用法の違いに起因すると考えられる。

また「蹶然」の使用例を見ると、『莊子』では、問答の最終部分において、非得道者が、得道者から決定的なことばを引き出す質問に伴うか、あるいは得道者のことばを聞いた反応に伴って用いられていた。これは他の文献に見えない独自の用法である。

更にこれら状態形容詞による人物描写の状況を考察すると、寓話の地の文の描写を用いて、巧妙に登場人物の属性を書き分けてい

ることがわかった。非得道者については、生き生きとした感情や、その意図が明確な動作の描写が為されるのに対し、得道者の方は喜怒哀楽をわかりやすく描かず、動作や意味不明なものが多い。このような対照的な書き分けによって、『莊子』は得道者の非人間性を描き出そうとしていると考えられる。

以上の特徴は、『莊子』の言語観から説明することができる。すなわち、語りの内部で、直接「道」を語ることを避けるために、地の文での工夫から創作的な寓話・虚構性の強い人物に現実味と得道者らしい性質を持たせ、「蹶然」を標識とすることで、そのことばが、語り得ない「道」を語る「至言」であることを明示しようとしたと推測できる。

(2) 演出的な叙述に基づく、『莊子』各篇の成立事情の差違の検証

他の先秦文献の例に漏れず、『莊子』も異なる成立時期や思想性を持ったテキストの集成と考えられる。内篇・外篇・雑篇の分類をはじめとして、様々な角度から各篇・各部分の成立時期の考証が行われてきた。本研究での演出的な叙述の特徴の分析から、『莊子』の各部分の成立事情について、以下の知見が得られた。

齊物論篇は、演出的な叙述について、非常に抑制的である点で他と異なっている。本篇については、従来から認識論や言語観・実際の言説の面で他篇との差違を指摘されてきたが、今回の調査もそれと合致する結果となった。

盗跖篇・説劍篇・漁父篇では、地の文での叙述は豊富なものの、それは人物のふるまいや姿を細かく明示的に描写することで劇的な情景を作り出すものであって、その方法において他篇とは大きな違いがあった。

以上の結論は従来の思想史的・書誌学的分析による結論と重なるものだが、それが表現形式という新しい視点から裏付けられたことは重要な意味を持つ。また表現形式からの分析がテキストの評価基準として有効性を持つことが確認できた。

(3) 漢代以降の文学への影響

『莊子』のケースをモデルとして、演出的叙述の差違によるテキスト評価を、前漢初期のテキストにも応用することができる。結果として、『史記』は、叙述の量は極めて豊富であるものの、上記の(1)で挙げたような『莊子』の特徴的な用法とは異なり、盗跖篇・説劍篇・漁父篇に見えるタイプと近似すること、司馬相如の問答賦の中には、『莊子』と類似する用法が見てとれることが得られた。このことは先秦諸子テキストの漢代における影

響や、前漢初期の諸文献の成立を考えるにあたって示唆を与えるものである。

以上(1)~(3)の成果は、2014年の日本中国学会での口頭発表及び15年の日本中国学会報に掲載された『『莊子』の寓話における演出的な叙述について』で発表した。後者の論文に対しては、日本中国学会賞が授与された。

(4) 『淮南子』との思想史的位置づけ--黄老文献との関係性の指摘

押韻句については、主に『淮南子』を検討の対象とした。『淮南子』は極めて多くの押韻句を含んでおり、既に押韻箇所について一定の調査がなされている。また自序的な性質をもつ要略があり、史書の記述と合わせて、その成立時期がほぼ確定できる。一方でその内容は極めて雑駁であり、道家思想を中心とすることは確かであるものの、通時的・共時的な位置づけにはなお不明確なところがある。

そこで本研究では『淮南子』に頻出する「天」や「天道」概念の分析を通して、当時の朝廷における「黄老」流行の影響が『淮南子』にも見られることを明らかにした。これによって、研究代表者が従来から蓄積してきた、「黄老」に関連する先秦から漢代にかけての道家テキストにおける押韻句使用の分析と接続し、先秦から漢初にかけての押韻句を軸とした見取り図を描くことが可能となった。

この成果は、2015年12月の阪神中哲談話会第400回記念大会において口頭発表を行った。

(5) 『淮南子』に見える「經典化」への志向

以上の研究を通して、表現形式の分析とはやや異なる要素ではあるが、『淮南子』のテキスト分析に資する発見があった。

『淮南子』要略は、「序」としての性質を持つ最初期のテキストとして重要な意味を持つ。本研究では、そこに見られる、書かれることで地域や時間を超えて伝達される「書」への強い意識に注目した。これは先秦道家とは決定的に異なる特徴と言えるが、『淮南子』全体を通して、同様の意識を背景とした、儒家や墨家などに並ぶ「經典」の創出という窺われることがわかった。雑駁な『淮南子』を総合的に捉えるため、また押韻句の分析に際しての先秦道家との関係性を考えるにあたって、表現に関わる思想として重要な要素であると言える。

この成果は2017年2月の東山の会例会において口頭発表を行った。現在、論文の執筆中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

鈴木達明、『莊子』の寓話における演出的な叙述について、日本中国学会報、査読有、第 67 集、2015 年、pp15-30
<http://nippon-chugoku-gakkai.org/utf8/hpkeisai/67/67-02.pdf>

〔学会発表〕(計 3 件)

鈴木達明、『淮南子』に見える経典化への志向、東山の会 2017 年 2 月例会、2017 年 2 月 18 日、京都女子大学(京都府・京都市)

鈴木達明、『淮南子』と黄老流行、阪神中哲談話会第 400 回記念大会、2015 年 12 月 6 日、ホテルルビノ堀川(京都府・京都市)

鈴木達明、『莊子』の寓話における演出的表現について、日本中国学会第 66 回大会、2014 年 10 月 11 日、大谷大学(京都府・京都市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 達明 (SUZUKI, Tatsuaki)
愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：90456814